

A 国 語

(50分)

答えはすべて **解 答 用 紙** に書き入れること。

【この冊子について】

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子に手をふれてはいけません。
2. この冊子は、初めに3ページ白紙があります。問題は1～7ページです。
3. 解答用紙は、冊子の中央にはさまっています。試験開始の合図後、取り出して解答してください。
4. 試験中に印刷のかすれやよごれ、ページのぬけや乱れ等に気づいた場合は、静かに手を挙げて先生に知らせてください。
5. 試験中、冊子がバラバラにならないように気をつけてください。

【試験中の注意】 以下の内容は、各時間共通です。

1. 試験中は先生の指示に従ってください。
2. 試験中、机の中には何も入れないこと。荷物はイスの下に置いてください。
3. 先生に申し出ればコート・ジャンパー等の着用を許可します。
4. かぜ等の理由でハンカチやティッシュペーパーの使用を希望するときは、先生の許可を得てから使用してください。
5. 試験中に気持ちが悪くなったり、どうしてもトイレに行きたくなったりした場合は、静かに手を挙げて先生に知らせてください。
6. 試験中、机の上に置けるのは、次のものだけです。これ以外の所持品を置いてはいけません。
 - ・受験票
 - ・黒しんのえん筆または黒しんのシャープペンシル（ボールペンとしても使えるものは不可）
 - ・消しゴム ・コンパス
 - ・直定規（分度器の機能が付いているものは不可） ・三角定規一組（10cm程度の目盛り付き）
 - ・時計 ・メガネ筆箱も机の上には置けませんので、カバンの中にしまってください。
7. 終了のチャイムが鳴り始めたら、ただちに筆記用具を置いてください。
8. 答案を回収し終えるまで、手はひざの上に置いてください。

一 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

かつてよくが東京農工大の農学部に勤めていたところ、ぼくの宿舎は小金井の工学部の一隅にあった。いわゆる公務員宿舎である。狭い二階建ての部屋が十戸^すずつほど連なったのが三棟と、二軒長屋（＝一階建ての二軒の家を一棟に建て連ねたもの）が何戸かあった。

入居者は若い教官や事務官が多いので、子どもたちはたくさんいた。夏になると、夕食後、子どもたちは宿舎のまわりで楽しそうに遊んでいた。

宿舎の北側はちょっとした林になっており、ひよろひよろした木がけっこうたくさん生えていた。そしてその下には、それらの木の若木やハギのような、どうということのない灌木（＝低木）があちらこちらに立っている。その間にはこれまたどうということのない草が茂っていた。

あるとき宿舎の集まりがあった。ぼくは出席できなかったが、あとで聞くと、裏の林から蚊が出るので、下草や木を刈ってきれいにしようと決めたということだった。

それから数日後の日曜日、入居者が総出で林をきれいにする作業が始まった。ぼくは午後まで大学の研究室にいたので、

戻ってきたらもう夕方近かった。

草刈りは林のへりから始められ、もうだいぶ奥まで進んでいた。働いている人々の後ろには、子どもたちがたくさん集まって、心配そうな顔つきでじっと見守っている。

何が心配なのかとぼくは子どもたちに聞いた。

「オバケの出るところがなくなっちゃう」

ある小さな子が泣き出しそうな声でそういった。

実は子どもたちはもうだいぶ前から、夏の夕暮れに肝だめしというかオバケごっこをして遊んでいたのである。

もう暗くなったところ、子どもたちは少し年上の子から、「さあ、ここから林の中へ入っていけよ」といわれる。それで、みんな半ばおもしろがって、半ば多少の不安を感じながら、下草を分けて林の中へ入っていく。すると突然、茂った灌木のかげからオバケが出てくるのだ！

キヤアといって子どもたちは逃げる。するとまた別の草かげから、また新しいオバケが現れる。運の悪い子はオバケにつかまってしまう。子どもたちにしてみれば、スリル満点の遊びだった。

ところが今、大人たちは蚊を退治しようとして草や灌木を刈っている。オバケの隠れている場所がなくなってしまうの

このページは白紙です。

ではないか？ 子どもたちはそれが心配だったのである。

ぼくはそのことを大人たちに話して、いくつかの「オバケの隠れ場所」を残してもらった。けれどそれ以後、子どもたちのオバケ遊びはすたれてしまったようである。自分たちだけの秘密が大人に知れてしまったからだ。① ぼくは余計なことをしてしまったのかもしれない。でも、林がすっきりきれいになったら、子どもたちはやっぱり悲しんだろう。

「崇り^{たけ}とご利益^{りやく}」というテーマを示されて、ぼくはかつてこの体験を思い出してしまった。これも「崇り」と「ご利益」の話ではないかと。

ここは神様のいる森だから、勝手に木を切ると必ず崇りがあるよ、という言い伝えが森を守ってきたという話はよく聞く。屋久島^{やくしま}でもそういうことを聞いた。これを積極的に使うと自然が守られる場合もありますよ、と笑いながら話してくれる人もいた。でも、このごろはみんな崇りなんか信じなくなりましたからねえ、とその人は嘆くようにつけ加えた。

ご利益だつて同じことである。ここの木を大事にしていると必ずご利益があるよ、という言い伝えもあちこちにある。でもそれを信じているのは土地のおばあさんかおじいさんで、若い人はそんなことに²ムカンシンだ。ましてや、よそから

が山の中にたくさん生えていた。

ぼくは感動してさっそくポケットに入れてきたナイフを開き、左右二本の茎をそろえて、地面すれすれの根元から切りとった。

とたんにそれを見ていた近所のおじさんがぼくをどなりつけた。「それはだみだー」おじさんはいった。イ「ほれ、この二本の茎の間に次の芽がある。こういうように左から切つて、その次に右から切つて、真ん中の芽を残してやるんだ。そうしたら、来年もまた生えてくる」。ぼくは一言もなかった。

おじさんは崇りとかご利益とかいう言葉は使わなかったけれど、明らかに崇りとご利益のことをいつていたのである。今から五十年前も前のことで、そのおじさんは当時五十歳くらい。もしまだ生きていれば、一〇〇歳近いだろう。山の崇りを信じている年代だったことはまちがいない。その人が③そういう言い方をしたことは、今思うと不思議でもあるが、実は不思議ではないのかもしれない。次の芽を守ることの大切さぐらいは、すぐわかる。崇りというのは、もっとわかりにくい、目の前ですぐには想像のつかないものという概念^{がいねん}なのだ。

来た観光客には通じない。

けれどこのような言い伝えの「崇り」や「ご利益」には、それ相応の理由があることはいうまでもないし、それが自然環境^{かんきやう}を守ってきたことも確かである。

ア「そんなところにオシッコをすると、オチンチンが腐りますよ」と小さいときによくいわれた。子どもだったから、男にとってオチンチンがどれほど大切なものはわからなかったが、それでもなんだか怖くて、オシッコをがまんしたことを憶^{おも}えている。

しかし、崇りやご利益はいつも②こういう形で人々の間に³ソングイしつづけていたのでもないようだ。

第二次大戦直後、つまりぼくが十六歳で中学四年の八月末、疎開^{そかい}先の秋田県大館^{おくだて}で、ぼくはある忘れられない体験をした。近所の人たちに誘^{さそ}われて、山へ山菜を採りにいったときのことである。

大館から汽車に乗って北の方へいく。たしか陣場^{じんば}という駅で降りて山中に入る。場所をよく知っている人に連れられていくと、そこここに大きな露^ろがおがって（生えて）いる。さすが、秋田路というだけあって、茎^{くき}（葉柄^{ようへい}）は太さ三センチもあろうか。そして高さはぼくの背丈^{せぢやう}ほど。そんな立派な露

農工大宿舎での林の草刈りはなんだったのだろうか？

宿舎の大人たちにすれば、その目的は蚊の退治だった。そして雑然と茂った林をすっきりときれいにしたいという願望もあった。今の言葉でいえば、環境の美化とアメニティ（住み心地の良さ）ということにもなるか。

それは大人たちにとってはある種のご利益であつたかもしれない。林がきれいになって、ついでに蚊もいなくなる、どちらが主目的だったかという、蚊の退治が第一の目的だったらしいことは、居住者の話し合いの様子から想像がつく。すると、蚊の退治が目的で、環境の美化はご利益だったということになる。

ここで一つの問題は、下草を刈ると本当に蚊がいなくなるのかということである。蚊にもいろいろな種類がいて、その発生場所つまり彼らの幼虫（ボウフラ）が育つ場所も種類によつてさまざまである。ふつうの家蚊^{いえか}（アカイエカ）には、小さくてもよいから多少深さのある水たまりが必要である。けれど小さなシマカたちは、つもった落ち葉の隙間^{すま}にたまる水で十分に育つが、決して茂った草の葉の間で育つわけではない。

だから、彼らを退治するのは草を刈っただけではだめで、

林の中の落ち葉をすべて ⁴ノゾき、地面をからからに乾かし

ておかねばならない。そういう林が環境「美化」につながるかどうか？ だから、林の草刈りは ⁴はじめから問題を含んでいたわけだ。

けれど、大人たちにとっての、このにもかくにももの「ご利益」はとんでもない崇りを招いた。つまりそれは、考えてもいなかったオバケの隠れ場所をなくし、子どもたちの楽しい遊びを一つ奪ってしまったのである。

まったく予想もできなかったという点でこれは、限りなく崇りに近い。林は子どもたちという神様の楽しい遊びの場であると考えると、これはまさに崇りである。

蚊を退治しようという大人たちの近視眼的な願望が、思いもかけぬ結果を招いたこのできごとは、それ以来ほくにしつかり焼きついている。これはまさにいわゆる環境問題の典型的なパターンであると、そのときはよくは直感したからである。

あれは今からもう四十年近く前のこと。その後同じような公害や環境問題が世界じゅうでいったいいくつ起こったことか。

考えてみると、これはわれわれ人間の文化の根本的問題なのかもしれない。

(中 略)

崇りの感覚は、大昔のどの時代にも、時代おくれのものとされた。そして古くはエジプトのピラミッドや神を恐れぬバベルの塔のように、それを乗りこえるものが人間の名に値する新しい文明であると、いつの時代にも認識されてきた。それが問題なのではあるまいか。

今さら崇りの思想をとり戻せということではない。 ⁵そこからもう一度考えなおしてみる必要があるのではないかというのである。

(日高敏隆「崇り」という思想」による)

問一 1の漢字の読みをひらがなで書きなさい。また、

2・3・4のカタカナを漢字に改めなさい。一画ずつ、ていねいに書くこと。

問二 ①「ぼくは余計なことをしてしまったのかもしれない」とありますが、なぜ「余計なこと」というのですか。理由を説明しなさい。

問三 ②「こういう形」と、③「そういう言い方」は

どう違いますか。~~~~アと~~~~イの言い方を比べて、自分の言葉で説明しなさい。なお、説明するときには、「ア」「イ」の記号を使いなさい。

問四 ④「はじめから問題を含んでいた」とありますが、

どのようなことが問題なのですか。二つに分けて、具体的に説明しなさい。

問五 ⑤「そこからもう一度考えなおしてみる必要がある

のではないか」とありますが、筆者は、自然に対する接し方をどのように考えなおす必要があるというのですか。説明しなさい。

二 次の詩を読み、後の問いに答えなさい。

しんじゅのぎょうれつ

まど・みちお

じいちゃんとおふろに入ったとき

ぼくおならが出ちゃった

くすぐたたくて おもしろくって

あはあは わらった

ばんごはんのとき そのはなし

ぼくがすると

にんげんのからだから出てくるものが

あんなに美しいんだからなあ…

とじいちゃんがためいきついた

そんなにほめたらおならが

きょうしゅくしますよとパパがわらい

ぼくもママも大わらいした

だがじいちゃんはまたじまんした

いやあれはほんとに

しんじゅのぎょうれつだったぞう！と

まるでおならがぼくとおなじに

じぶんのまごでもあるかのように…

問一 第三連に「そんなにほめたらおならが／きょうしゅくし

ますよ」とありますが、この言い方のおもしろさは、どう
いうところにありますか。「きょうしゅく」という言葉に
気をつけて、説明しなさい。

問二 第四連に「しんじゅのぎょうれつだったぞう！」とあり

ますが、このように言ったとき、「じいちゃん」はどのよ
うな気持ちだったと思いますか。説明しなさい。

三 ひらがなの「や」と「ら」とを、「例」にならって、

一画ずつ増やしていくかたちで正しく書きなさい。

また、「を」をカタカナに直して、同じように一画ず

つ増やしていくかたちで正しく書きなさい。ただし、

マス目をすべて使うとは限りません。

例「い」↓

し
い

A
国
語

14

解
答
用
紙

受験番号
氏 名

一

問
一

1

2

3

4

問
二

問
三

問
四

問
五

二

問
一

問
二

三

「や」↓

「ら」↓

「を」

(カタカナ)

↓